

テノール独唱者グラハム・バター（1901～1992）の活動歴

津 上 智 実

Musical Activities of the Tenor Soloist Graham Batter (1901-1992)

TSUGAMI Motomi

要 旨

本稿の目的は、昭和戦前期の日本でテノール独唱者として活躍した H. S. グラハム・バター Herbert Stanley Graham Batter (1901-1992) の活動歴を明らかにすることである。グラハム・バターは1925年来日した英国人で、ヘンデルの《メサイア》(1927、1930、1934~1936、1938~1940年に出演、以下同じ)を始め、バッハ《クリスマス・オラトリオ》(1931)、シューベルト《ミサ曲》(1932)、シュポア《最後の審判》(1932)、ロッシーニ《スタバト・マーテル》(1932)、メンデルスゾーン《讃歌》(1933)、シュタイナー《磔刑》(1935、1939)等でテノール独唱者を務めて、声の美しさと歌唱の確かさで人々に感銘を与えた。英国で少年聖歌隊員として頭角を現し、パリやロンドンでオラトリオのソリストとして活躍した経歴の持ち主であり、優れたテノール独唱者として希少な存在であったことが知られる。《メサイア》の日本初演(1925)以降、次第に高まっていく合唱運動の中で、人々にオラトリオ歌唱の理想的なあり方を示した点で、音楽的・社会的に功績があったと考えられる。

キーワード：メサイア、オラトリオ、合唱、テノール、独唱者

Abstract

The purpose of this paper is to clarify the activity history of Herbert Stanley Graham Batter (1901-1992), who was active as a tenor soloist in Japan in the Showa prewar period. Coming to Japan in 1925 as an British businessman, Graham Batter performed remarkably well as tenor soloist of the following oratorios and sacred music: G. F. Handel's "Messiah" (sung in 1927, 1930, 1934-1936, 1938-1940), J. S. Bach's "Christmas Oratorio" (1931), F. Schubert's "Mass" (1932), L. Spohr's "The Last Judgement" (1932), G. Rossini's "Stabat Mater" (1932), F. Mendelssohn's "Hymn" (1933), J. Steiner's "Crucifixion" (1935, 1939) and others. He impressed his audience with the beauty of his voice and the accuracy of his singing. He distinguished himself early as a boy soprano in England, and had a career as an oratorio tenor soloist in Paris and London.

He was also good in such light operas as Gilbert & Sullivan's, giving impressive presentations of them in Yokohama and Tokyo. He often sang at church services, especially at the Yokohama Union Church. His repertoire included songs by Liza Lemann or Roger Quilter.

In contrast to these light or modern songs, which were enjoyed much in the circles of foreigners in Yokohama and Tokyo, oratorios and religious music like Handel's "Messiah" had greater influence on Japanese society and culture.

When "Messiah" premiered in Japan in 1925, choral singing was developing in Japan. In this situation, he played an important role by showing people the ideal way of oratorio singing, with his excellent diction and musical interpretation as well as his unforgettable voice.

Keywords: Messiah, Oratorio, choir, tenor, soloist

本稿の目的は、昭和戦前期の日本でテノール独唱者として活躍した英国人 H. S. グラハム・バター Herbert Stanley Graham Batter (1901-1992) の活動歴を明らかにすることである。

グラハム・バターは職業的な音楽家ではなく、石油会社に勤める企業人であったので¹⁾、音楽活動はあくまでアマチュアとしてのものであったが、その声質の良さと歌唱の技量とは群を抜いており、英字新聞『ジャパン・タイムズ *The Japan Times*』で来日前のヨーロッパでの音楽歴が記事として報道されるほどであった。管見の限り、当時、このような記事の例は他に見当たらず、極めて例外的な扱いであったとすることができる。

そこで本稿では、まずこの特記記事から説き起こし（第1節）、グラハム・バターの多彩な活動を、演奏の場と音楽ジャンルとに従って分類した上で明らかにする（第2節）。続いて演奏評からグラハム・バターの声と演奏に対する評価をまとめ（第3節）、生涯の概略を示した上で（第4節）、アマチュアの音楽活動の意義を論じて総括とする（第5節）。

1. 1927年の特記記事

上述の特記記事とは、1927年4月12日付『ジャパン・タイムズ』の記事‘Mr. Graham Batter, Soloist in Messiah, Is Experienced Singer’である（1927-4-12 JT²⁾）。そこには次のように記されている。

Mr. Graham Batter of Kobe, who is to sing solo parts in the Messiah, which is to be given by the Tokyo Oratorio Society at the Sei Nen Kan on the evening of April 16, began his musical career in his boyhood. He was given excellent teachers, and early sang in public as a soprano soloist at Westminster and other London churches. Thus while a mere youth he became familiar with oratorios and other sacred music. Later he studied music at Trinity College, London, and sang under Bouet in Paris. He became a tenor soloist, singing at St. Anne's Soho, famous for its Bach, at St. Clement Danes' Strand, and at the Pro-Cathedral Kensington. He attained to a wide knowledge of sacred music, singing frequently from the great masters, Mozart, Gounod, Schubert, Handel, Mendelssohn and Bach. He has also sung in light opera at Albert Hall, Queens Hall, and in many other noted music halls in London and all over the British Isles.

Tokyo people have had the opportunity of hearing Mr. Graham Batter at a former concert given by the Tokyo Oratorio Society, and his appearance at the coming rendition of the Messiah will be looked forward to eagerly by Tokyo music lovers.

1) ライジングサン石油株式会社 (Rising Sun Petroleum Co.) 勤務であることが1926年の記事 (1926-6-12 JT) でも、1941年の離日時の記事 (1941-11-8 JT) でも述べられている。ライジングサン石油株式会社は1900年にサミュエル商会 (シエル・トランスポート&トレーディング・カンパニー) の日本法人として設立された会社で、昭和シエル石油株式会社の前身。

2) 以下、JTは『ジャパン・タイムズ』の略で、先行する数字は記事掲載の年月日を示す。

このように、グラハム・バターは少年時代からボーイ・ソプラノとしてウエストミンスター寺院を始めとするロンドンの諸教会で歌い、ロンドンのトリニティ・カレッジで音楽を専門的に学んだ後、テノールの独唱者として、パリや英国各地でバッハ、ヘンデル、モーツァルト、グノー、シューベルト、メンデルスゾーン等の宗教曲を歌ってきた経歴の持ち主であって、オラトリオ並びに宗教曲の歌い手としてスペシャリストであったことが知られる。

グラハム・バターに関する『ジャパン・タイムズ』の記事を概観すると、1925年3月6日の初出から1941年11月14日の離日までの16年間に報道された記事の総数は124点に及ぶ³⁾。

これらの記事から、グラハム・バターは1925年の来日当初、神戸に着任して⁴⁾、神戸の音楽・演劇サークルで活動を始めており⁵⁾、東京で活躍して知られるようになったのは1926年以降と考えられる。

とはいえ、この間の事情は必ずしも詳らかではない。上記の特記記事（1927年4月12日付）は‘Tokyo people have had the opportunity of hearing Mr. Graham Batter at a former concert given by the Tokyo Oratorio Society’ と伝えるが、東京コミュニティ・オラトリオ・ソサエティがそれまでに行った定期演奏会のテノール独唱者は次の通りであって、第3回までにグラハム・バターの名は見当たらない。

表1：東京コミュニティ・オラトリオ・ソサエティ定期演奏会（第1～4回）のテノール独唱者

| 定期 | 年月日 | 演奏曲目 | テノール独唱者 |
|-----|------------|--------------------------------|-------------------|
| 第1回 | 1925-6-14 | グノー《ガリヤ》、デュボア《キリストの十字架上の七つの言葉》 | E. T. アイグルハート |
| 第2回 | 1925-12-20 | ヘンデル《メサイア》 | 斎藤齊 |
| 第3回 | 1926-4-24 | ハイドン《天地創造》 | 斎藤齊、E. T. アイグルハート |
| 第4回 | 1927-4-16 | ヘンデル《メサイア》 | G. バター |

表1に見るように、第1回から第3回までの定期演奏会のテノール独唱者は斎藤齊（1898～1961）⁶⁾ とエドウィン・テイラー・アイグルハート Edwin Taylor Iglehart（1878-1964）⁷⁾ であるから、グラハム・バターの出演は定期演奏会以外の場であったと考える他ない。そのような場としては、1926年12月18日に日比谷公園で行われた東京市民クリスマス会（キリスト教の11団体によって編成された）の番組10番に‘Concert (an extract form Dettingen) by the Tokyo Oratorio Society’ とあるので（1926-12-14 JT）、ここでグラハム・バターが歌った可能性が考

3) 記事掲載の年別の内訳は次の通り：1925年（1点）、1926年（5点）、1927年（4点）、1930年（10点）、1931年（6点）、1932年（21点）、1933年（9点）、1934年（10点）、1935年（10点）、1936年（5点）、1937年（4点）、1938年（7点）、1939年（4点）、1940年（17点）、1941年（11点）。

4) 1927年版の『ジャパン・ディレクター』によれば、勤務先は‘Rising Sun Petroleum Co. Ltd., Osaka Shosen Bildg., Kaigandori’、すなわち神戸旧居留地海岸通5番地の大阪商船神戸支店（現在の通称は商船三井ビル、1922年建造）であった（429頁）。

5) 1925年3月に神戸アマチュア演劇クラブ（Kobe Amateur Dramatic Club）公演（1925年3月3日と5日、神戸体育館劇場）に出演し（1925-3-6 JT）、翌年5月に神戸音楽協会（Musical Association of Kobe）の第1回演奏会（1926年5月17日、兵庫県公会堂）に出演して歌ったことが報じられている（1926-5-19 JT）。

6) 斎藤齊（1898～1961）は、内閣統計局に勤めながら、東京音楽学校の外国人教師に師事し、欧米で数学研究をした際にも声楽を習うなどした人物である（鶴橋 1927, 110）。

7) E. T. アイグルハート（1878～1964）はメソジスト監督派教会宣教師で、青山学院等で長く教鞭を執った。讚美歌編纂にも関わり、礼拝や演奏会でしばしば合唱や独唱で歌っている。

えられる。というのも、本来、1926年12月に東京コミュニティ・オラトリオ・ソサエティの第4回定期演奏会として《メサイア》上演が予定されて、そのテノール独唱者としてグラハム・バターの名が挙げられていたからである。事実、12月5日の紙面で「神戸のグラハム・バター氏は東京の大半の聴衆には初耳だが、あらゆるレポートは、彼が驚くほど鍛え上げられたすばらしい声の持ち主であると伝えている」⁸⁾と紹介されている(1926-12-5 JT)。結局、この《メサイア》上演は大正天皇の薨去(1926年12月25日)のために翌年春に延期され、その4月の《メサイア》上演に関する報道の一環として、上述の特記記事が掲載されたのである。

2. 演奏活動

グラハム・バターの演奏活動は多岐に亘っている。便宜上、それらを演奏の場と音楽ジャンルとの相関で分類してみると、(1)大きな演奏会場におけるオラトリオ等の大規模作品のソリスト、(2)教会における演奏会での歌唱、(3)教会の礼拝での歌唱、(4)オペレッタ等の軽い劇作品の制作と出演、(5)コミュニティの催しへの出演、と大別することができる。この分類に従ってグラハム・バターの演奏活動を見てみよう。

(1) 大会場におけるオラトリオ等のソリスト

グラハム・バターは、オラトリオ等の大規模作品でテノールのソリストを次々と務めた。それらはいずれも東京と横浜の大きなホールで行われた公演で、まずは指揮者のフレッド・ダニエル・ゲーリー Fred Daniel Gealy (1894-1976)⁹⁾ が率いる東京コミュニティ・オラトリオ・ソサエティ (Tokyo Community Oratorio Society) の定期演奏会への出演であった。

具体的には、東京コミュニティ・オラトリオ・ソサエティの第4回公演(1927年4月16日、日本青年館)と第7回公演(1930年12月11日、神田YWCA会館)において、ゲオルク・フリードリッヒ・ヘンデル Georg Friedrich Handel (1685-1759) 作曲のオラトリオ《メサイア Messiah》にテノール独唱者として出演したのを始め、第9回公演(1931年12月10日、フェリス女学院講堂/1931年12月12日、本郷中央会堂)でヨハン・ゼバスティアン・バッハ J. S. Bach (1685-1750) 作曲《クリスマス・オラトリオ Christmas Oratorio》、第10回公演(1932年6月4日、青山女学院講堂)でフランツ・シューベルト Franz Schubert (1797-1828) 作曲《ミサ曲 Mass in E Flat》第6番、第11回公演(1932年12月8日、フェリス女学院講堂/1932年12月10日、本郷中央会堂)でジョアッキノ・ロッシーニ G. Rossini (1792-1868) 作曲《スタバト・マーテル Stabat Mater》他¹⁰⁾でテノール独唱者を務めた。

8) 'Mr. J. C. [sic] Graham Batter of Kobe is new to most Tokyo audience, all reports of him are that he has a splendid voice, wonderfully trained.'

9) フレッド・ダニエル・ゲーリー (1894~1976) はアメリカ・メソジスト監督派教会の宣教師で、1923年に来日して青山学院神学部で新約聖書の教授を務めた。優れた音楽家でもあり、帰米後も複数の大学で教会音楽を教えた。『日本キリスト教歴史大事典』は「1924年に東京オラトリオ会を組織、離日するまで指揮棒を振り続けた。〈メサイア〉〈天地創造〉などを公開演奏したのは、日本では彼が最初であり、左利きの指揮ぶりが印象的であった」と伝える(10頁)。

10) 1932年の第11回公演では、ロッシーニ《スタバト・マーテル》に加えて、バッハ《マタイ受難曲》から〈来たれ、娘たちよ Come Ye Daughters〉、ディキンソン Clarence Dickinson (1873-1969) 作曲のクリスマスのアンセム2曲、ペルゴレージ作曲 'Glory to God'、チャイコフスキー作曲 'O Praise Ye God' が歌われた(1932-12-4 JT)。

その後、1934年からは、指揮者の中田羽後（1896～1974）¹¹⁾ が率いる東京ヴォランティア合唱団（Tokyo Volunteer Choir）の毎年12月のヘンデル《メサイア》公演にテノール独唱者として出演している。すなわち、東京ヴォランティア合唱団の第9回公演（1934年12月18日、日本青年館）、第10回公演（1935年12月10日、日本青年館）、第11回公演（1936年12月15日、日比谷公会堂）¹²⁾、第13回公演（1938年12月3日、日本青年館）、第14回公演（1939年12月2日、日比谷公会堂）、第15回公演（1940年12月14日、日比谷公会堂）に出演して、いずれもテノール独唱者として《メサイア》を歌った（表2参照）。

表2：大会場におけるオラトリオ等の上演（グラハム・バターがテノール独唱者を務めたもの）

| 年月日 | 曲目（会場）演奏会（合唱の人数）共演者【チャリティーの対象】 | 出典* |
|------------|--|-------------------------------|
| 1927-4-16 | ヘンデル《メサイア》（日本青年館）TCOS 第4回、C：F. D. Gealy, S：N. Loewe, A：L. Daugherty, B：J. R. McKenlay, P：C. Curtiss | 4/12, 15 |
| 1930-12-11 | ヘンデル《メサイア》（YWCA）TCOS 第7回、C：F. D. Gealy, S：F. Iglehart, A：L. Daugherty, B：J. R. McKenlay, P：C. Curtiss【YWCAの活動】 | 11/22, 12/5, 12 |
| 1931-12-10 | バッハ《クリスマス・オラトリオ》（フェリス女学院講堂）TCOS 第9回、C：F. D. Gealy, S：F. Iglehart, A：L. Daugherty, B：J. R. McKenlay, P：Henninger【横浜キリスト教会の日曜学校】 | 11/30, 12/12 |
| 1931-12-12 | バッハ《クリスマス・オラトリオ》（本郷中央会堂）TCOS 第9回、C：F. D. Gealy, S：F. Iglehart, A：L. Daugherty, B：J. R. McKenlay, P：Henninger | 11/30 |
| 1932-6-4 | シューベルト《ミサ曲》（青山女学院講堂）東京初演、TCOS [第10回]、C：F. D. Gealy, S：Minako Hirai, A：L. Daugherty, B：中田羽後 | 6/3 |
| 1932-12-8 | ロッシーニ《スタバト・マーテル》他（フェリス女学院講堂）TCOS 第11回、C：F. D. Gealy, S：Minako Hirano, M：Georgene Bowen, A：L. Daugherty, B：J. R. McKenlay, P：Miss Verginia Reeves【横浜ユニオン教会女性援助会の後援】 | 12/4 |
| 1932-12-10 | ロッシーニ《スタバト・マーテル》他（本郷中央会堂）TCOS 第11回、C：F. D. Gealy, S：Yoshiko Kinoshita, M：Georgene Bowen, A：L. Daugherty, B：J. R. McKenlay, P：Miss Reeves | 12/4 |
| 1934-12-18 | ヘンデル《メサイア》（日本青年館）TVC（70人）[第9回]、C：中田羽後、B：J. R. McKenlay | 12/18 |
| 1935-12-10 | ヘンデル《メサイア》（日本青年館）TVC [第10回]、C：中田羽後、S：Maria Toll, A：柳兼子、B：矢田部勤吉、P：F. D. Gealy【興望館セツルメント】 | 11/19, 25, 12/7, 9, 10, 11 |
| 1936-12-15 | ヘンデル《メサイア》（日比谷公会堂）TVC [第11回]、C：中田羽後、S：Marie Leidal, A：河野清、B：J. R. McKenlay, 新響【東京メソジスト社会事業連合会】 | 12/14, 15, 17, 20 |
| 1938-12-3 | ヘンデル《メサイア》（日本青年館）TVC（150人）第13回、C：中田羽後、S：T. Tezuka, A：河野清、B：橋本 | 11/17, 29 |
| 1939-12-2 | ヘンデル《メサイア》（日比谷公会堂）TVC（200人）第14回、C：中田羽後、オケ（30人）【聖クリストファー教会のセツルメント】 | 11/26, 12/4 |
| 1940-12-14 | ヘンデル《メサイア》（日比谷公会堂）TVC（120人）第15回、C：中田羽後、S：野崎住子、A：河野清、B：矢田部勤吉、鈴木弦楽オーケストラ（22人）【白十字協会 White Cross Society】 | 11/27, 12/3, 5, 7, 10, 14, 15 |

合唱団：TCOS = Tokyo Community Oratorio Society, TVC = Tokyo Volunteer Choir

C = 指揮者、S = ソプラノ、MS = メゾソプラノ、A = アルト、B = バス、O = オルガン、P = ピアノ

* = 『ジャパン・タイムズ』の記事の掲載日（「年」は基本的に省略、以下同じ）

11) 中田羽後（1896～1974）は青山学院やシカゴ音楽院等で学び、東京ヴォランティア合唱団を組織して1932年から毎年12月にヘンデル《メサイア》の演奏を行った。

12) 1937年12月の《メサイア》演奏については後述参照。

表2に見るように、これらの大規模な演奏会は、社会事業等への資金援助としてチャリティー・コンサートの性格を持つものが多かった。

(2) 教会における演奏会での歌唱

次に中規模の演奏会として、教会堂での演奏会への出演を取り上げる（表3参照）。

表3：教会における演奏会（グラハム・バターがテノール独唱者を務めたもの）

| 年月日 | 曲目（会場）（合唱の人数）演奏会、共演者【慈善の対象】 | 出典 |
|------------|--|-------------|
| 1932-3-14 | シュポア《最後の審判》（横浜クライスト・チャーチ）C：J. R. McKenlay | 3/10 |
| 1932-3-18 | シュポア《最後の審判》（東京聖三一教会）聖アンデレ教会と聖三一教会の混成合唱（30人）、C：J. R. McKenlay, S：Ruth Apar, Contralto + Tenor：GB, B：J. Fisher, O：Eric Lewis【両教会の音楽基金】 | 3/10 |
| 1933-4-27 | 横浜ユニオン・チャーチの復活祭の音楽会、リザ・レーマン《ベルシヤの花園》から‘Ah, Moon of My Delight’, ‘Eleanore’ by S. Coleridge-Taylor | 4/13, 26 |
| 1933-5-18 | メンデルスゾーン《讃歌》（東京聖三一教会）（30人）、S1：Mrs. H. S. Dunn, S2：Mrs. A. Gerdts, O：Eric Lewis | 5/4, 10, 18 |
| 1933-5-19 | メンデルスゾーン《讃歌》（横浜クライスト・チャーチ） | 5/4, 18 |
| 1935-4-26 | シュタイナー《磔刑》（30人）（横浜ユニオン・チャーチ）C：F. D. Gealy, S：N. Andrews, A：Mrs. Blundel, B：J. R. McKenlay, O：Leslie Smith | 4/20 |
| 1936-12-13 | ブキャナン Percy Buchanan 作曲オラトリオ《サイモン・ピーター Simon Peter》（横浜クライスト・チャーチ）（30人余）、C：C. H. Thorn, S：R. Apar, A：Mrs. W. Blundell, B：J. R. McKenlay | 12/6 |
| 1939-4-2 | シュタイナー《磔刑》（東京聖三一教会）C：D. Overton, B：I. J. Fisher | 4/1 |
| 1939-4-7 | シュタイナー《磔刑》（横浜クライスト・チャーチ）C：D. Overton, B：I. J. Fisher | 4/1 |
| 1940-12-21 | ヘンデル《メサイア》抜粋（横浜クライスト・チャーチ）オルガン序曲、‘Comfort Ye’, ‘Every Valley’, 合唱 ‘And the Glory of the Lord’ | 12/21 |

まず1932年3月14日に横浜クライスト・チャーチ（Yokohama Christ Church）¹³⁾で、その4日後（1932年3月18日）に東京聖三一教会（Tokyo Holy Trinity Church）で、ルイ・シュポア Louis Spohr（1784-1859）作曲のオラトリオ《最後の審判 The Last Judgement》をジョン・ロイ・マッケンレー John Roy McKenlay（1892-1937）¹⁴⁾の指揮で歌った。この上演でグラハム・バターはコントラアルトとテノールの2役を一人で歌っており、声域の広さと歌唱能力の高さが窺われる。

翌1933年の5月には、18日に東京聖三一教会で、翌19日には横浜クライスト・チャーチで、フェリックス・メンデルスゾーン Felix Mendelssohn（1809-1847）作曲の《讃歌 Hymn of Praise》¹⁵⁾を歌っている。

1935年4月26日には横浜ユニオン・チャーチ（Yokohama Union Church）¹⁶⁾でジョン・シュ

13) 1862年に横浜に創立された聖公会の教会。

14) ジョン・ロイ・マッケンレー（1892～1937）は三菱商事海上保険部に入社のため1920年来日し（1937-9-28 JT）、1937年に没するまで東京や横浜の教会や舞台で活躍した。

15) 独唱と合唱付きの交響曲第2番（1840）の第2部。9曲の合唱曲から成る。新聞記事ではしばしば「オラトリオ」と記載されている。

16) 横浜ユニオン・チャーチは、横浜市にある在日外国人プロテスタントの超教派的教会。

タイナー John Steiner (1840-1901) 作曲のオラトリオ《磔刑 The Crucifixion》をゲーリーの指揮で歌い、4年後には、同じくシュタイナーの《磔刑》をダグラス・オーヴァートン Douglas William Overton (1915-1978)¹⁷⁾ の指揮で歌っている。後者は東京聖三一教会 (1939年4月2日) と横浜クライスト・チャーチ (1939年4月7日) との2公演であった。

このように東京と横浜の2つの教会で演奏することで、両コミュニティの活性化を促すと共に、チャリティー・コンサートとしての成果を上げていったのである。

(3) 教会の礼拝での歌唱

グラハム・バターは、横浜ユニオン・チャーチの礼拝で繰り返し歌っており、ここが横浜での彼の所属教会であったと推測される。この教会の礼拝での歌唱は、1932年に3回、1933年に1回、1934年に2回、1935年と1936年は1回、1937年は2回となっている (表4参照)。

表4：教会の礼拝での演奏 (グラハム・バターがテノール独唱者を務めたもの)

| 年月日 | 催し | 出典 |
|------------|---|------------------|
| 1932-2-7 | 横浜ユニオン・チャーチの朝礼拝で独唱、《エリヤ》から 'If With All Your Heart', 《放蕩息子》から 'I Will Arise' | 2/6 |
| 1932-5-15 | 横浜ユニオン・チャーチの母の日礼拝で独唱、two old favorites, 'Mother O'Mine', 'Mother Machree' | 5/8 |
| 1932-12-24 | 横浜ユニオン・チャーチのクリスマス礼拝で独唱、'Cast Thy Burden' by Hall, 'How Lovely Are They Dwellings' by Liddle | 12/24 |
| 1933-4-16 | 横浜ユニオン・チャーチの復活祭の礼拝で歌唱、'King Ever Glorious' by Steiner, 'Easter Flowers' by Sanderson | 4/15 |
| 1934-4-1 | 横浜ユニオン・チャーチの復活祭の礼拝で歌唱、'King Ever Glorious' by Steiner, 'Easter Flowers' by Sanderson | 3/31 |
| 1934-12-23 | 横浜ユニオン・チャーチのクリスマス礼拝で独唱、《メサイア》から 'He was cut off' (Rec) & 'Thou didst not leave' (Aria); 'Comfort ye' (Rec) & 'Every valley shall be exalted' (Aria) | 12/22 |
| 1935-12-22 | 横浜ユニオン・チャーチのクリスマス礼拝で独唱、Hymn 'Hark! The Herald Angels Sing' | 12/22 |
| 1936-12-27 | 横浜ユニオン・チャーチのクリスマス礼拝で独唱、'O Come Let Us Worship', ヘンデル《メサイア》から 'Comfort ye' | 12/20 |
| 1937-5-5 | 横浜ユニオン・チャーチの母の日礼拝で独唱 | 5/1 |
| 1937-12-11 | 立教大学礼拝堂の『東京ヴォランテヤ・コワイヤ「メシヤ」に拠る讚美礼拝』、C：中田羽後、S：牧山美子、A：河野清、B：矢田部勁吉、伴奏：D. オーヴァートン | 12/3、 プログラム現物 |
| 1937-12-19 | 横浜ユニオン・チャーチのクリスマス礼拝で独唱、'Gesu Bambino' by Yon, 'Christmas Bells are Ringing' by Hamblen | 12/19 |
| 1938-10-6 | 指路教会での葬儀礼拝で歌唱、《メサイア》から 'I know that My Redemer Liveth' | 10/8 |
| 1941-4-11 | 横浜クライスト・チャーチの礼拝で独唱、ヘンデル《メサイア》からのレチタティーヴォとアリア | 4/11 |

表4の中で、1937年12月11日の立教大学礼拝堂における『東京ヴォランテヤ・コワイヤ「メシヤ」に拠る讚美礼拝』については説明が必要である。この演奏機会に関して『ジャパン・タイムズ』の記載は変則的で、これに言及した唯一の記事「クリスマス礼拝が行われる To Give

17) ダグラス・ウィリアム・オーヴァートン (1915~1978) は1936年来日し、1941年に帰米するまで立教大学教授として教え、戦後も横浜領事等、要職を歴任した (鈴木 2020, 141)。

Xmas Service」には、会場と日時、指揮者と独唱者名は記載があるものの、‘The program will be as follows: ’の後は空白になっており、合唱団の名称も書かれていない（1937-12-3 JT）。上掲の表2で、東京ヴォランティア合唱団の第12回定期公演に当たる1937年の欄が欠けているのは、そのためである。一方、偶然にも本稿の執筆中に古書店サイトで見つけたのが、この讚美礼拝のプログラム冊子（8頁）で、このプログラム冊子によって東京ヴォランティア合唱団が出演してヘンデル《メサイア》抜粋を歌ったことが判明した。1918年竣工の立教大学諸聖徒礼拝堂は席数275で、日比谷公会堂（1929年竣工、2074席）や日本青年館（初代、1925年竣工、1249席）に比して収容人数が少ない。そのためもあって、新聞に掲載して一般の聴衆を募るのではなく、あくまで立教大学の関係者を中心とした讚美礼拝として《メサイア》の抜粋演奏が行われたものと考えられる。

演奏曲目に関して、教会の礼拝では、伝統的なクリスマス・ソングや母の歌に加えて、アーサー・サリヴァン Arthur Sullivan（1842-1900）の《放蕩息子 The Prodigal Son》からの歌、さらにメンデルスゾーンの《エリヤ》やシュタイナーの《磔刑》、ヘンデルの《メサイア》といったオラトリオからのレチタティーヴォやアリアが歌われている。

（4）オペレッタ等の軽い劇作品の制作と出演

上述の特記記事（1927-4-12 JT）には次の一文もあった。‘He has also sung in light opera at Albert Hall, Queens Hall, and in many other noted music halls in London and all over the British Isles.’ グラハム・バターはオペレッタ等の軽い劇作品へも多数出演して経験豊かな歌手であったことが知られる。ロンドンのアルバート・ホール（1871年開場）は8,000人、クイーンズ・ホール（1893年開場）は3,000人を収容できる大劇場で、この大舞台を始めとしてロンドンとイギリス諸島各地の主要なホールで歌ってきたというのであるから、相当なキャリアである。

実際、グラハム・バターはこうしたオペレッタに詳しく、自ら出演するだけでなく、公演の制作も引き受けている（表5参照）。

表5：オペレッタ等への出演

| 年月日 | 催し | 出典 |
|-------------|---|------------------|
| 1925-3-3, 5 | 神戸アマチュア演劇クラブの公演（神戸体育館劇場）で歌唱 | 3/6 |
| 1926-5-16 | 神戸音楽協会の第1回音楽会（兵庫県公会堂）で歌唱 | 5/19 |
| 1932-5-26 | 東京アマチュア演劇クラブの公演（帝国ホテル講堂）に出演、サリヴァン《ミカド》《ゴンドラの漕ぎ手》からのアリア、オフエンバック《ブラバントのジュヌヴィエーヴ》からの二重唱 | 5/27、評あり |
| 1939-12-15 | 東京アマチュア演劇クラブの公演「ギルバート&サリヴァンの夕べ」の制作、横浜国際女性クラブのプログラムとして | 1/26, 30 (1940) |
| 1940-1-29 | 東京アマチュア演劇クラブの公演「ギルバート&サリヴァンの夕べ」(HNG)の制作【静岡地震被害者援助】 | 1/26, 30 |
| 1940-2-5 | 東京アマチュア演劇クラブの公演「ギルバート&サリヴァンの夕べ」(蚕糸会館)の制作【静岡地震被害者援助】英国戦争慈善協会後援 Under the auspices and for the benefit of the British War Charities Association | 1/26, 30, 31、評あり |

HNG = Hotel New Grand

1932年5月26日には東京アマチュア演劇クラブの公演（帝国ホテル講堂）に出演して、好評を得ている。すなわち、サリヴァンの喜歌劇《ミカド The Mikado》(1885) から ‘Here’s a How-De-Do’ を、同じくサリヴァンの《ゴンドラの漕ぎ手 The Gondoliers》(1889) から《輝く瞳を Take a Pair of Sparkling Eyes》を独唱し、ジャック・オッフエンバック Jacques Offenbach (1819-1890) のオペレッタ《ブラバントのジュヌヴィエーヴ Genevieve de Brabant》(1859) から《憲兵の二重唱 Gendarmes Duet》をマッケンレーと歌って好評を博している（1932-5-27 JT）。

1939年12月から翌年2月にかけては、東京アマチュア演劇クラブの公演「ギルバート&サリヴァンの夕べ」を制作し、横浜と東京で3公演（12月15日、1月29日、2月5日）を行って静岡地震¹⁸⁾の被害者救済に当たったことが知られる（1940-1-26, 30, 31 JT）。

この内、1月29日の横浜ホテル・ニュー・グランド講堂での公演については、翌日の紙面に“Yokohama Enjoys Light Music By Gilbert-Sullivan, Entertaining Vocal Program At New Grand Auditorium Arranged by Graham Batter”と題する批評記事が掲載されて、演奏曲目¹⁹⁾の他、演奏レヴェルの高さや舞台の底抜けの楽しさが語られている。その終わりの方に次の記述がある。‘It is earnestly suggested and eagerly hoped that the “Graham Batter Light Opera Company” will some day widen the scope of its activities and embark on a complete stage presentation of one of the Gilbert-Sullivan works!’ (1940-1-31 JT) すなわち、これを「グラハム・バター・ライト・オペラ・カンパニー」と呼んで更なる発展が祈念されるほどの感銘を与えたことが伝わってくる。

（5） コミュニティーの催しへの出演

「コミュニティーの催しへの出演」として際立っているのが、国際女性クラブ（International Women’s Club）²⁰⁾の音楽会への出演である。グラハム・バターは1930年からの5年間は毎年（1930年1月24日、1931年1月23日、1932年4月15日、1933年3月24日、1934年4月13日と14日）、その後も1938年1月21日と1941年2月28日にこの団体の演奏会に出演している（会場はいずれも横浜のホテル・ニュー・グランド）。歌うだけでなく、1932年と1933年、1941年には演奏会全体を企画・制作する役割も果たしている（公演実施日は1932年4月15日、1933年3月24日、1941年2月28日）（表6参照）。

演奏曲目としては、リザ・レーマン Liza Lehmann (1862-1918) の4人のソリストとピアノ伴奏のための連作歌曲集《ペルシャの花園 In a Persian Garden》(1896)²¹⁾を、1934年にはソ

18) 1939年5月1日の静岡地震（M6.4）

19) 演奏曲目はサリヴァンの《ミカド》から愛の二重唱1曲、三重唱4曲、五重唱1曲、六重唱1曲、《イオランテ Iolanthe》から独唱1曲、三重唱2曲、四重唱1曲、六重唱1曲、《ゴンドラの漕ぎ手》から独唱1曲、二重唱1曲、四重唱2曲。その内、テノール独唱の《輝く瞳を Take a Pair of Sparkling Eyes》は十八番の曲なのでグラハム・バターが歌ったと考えられる。

20) 横浜国際女性クラブ（Yokohama International Women’s Club）は1929年の創立で、戦争等による紆余曲折を経ながら、現在も活動を続けている（<http://yiwc.lady.jp>）。

21) リザ・レーマン《ペルシャの花園》は、オマル・ハイヤームの詩集『ルバイヤート』をエドワード・フィッツジェラルドがカトレン形式に翻案したテキストによる連作歌曲集で、そのエキゾチックな歌詞と抒情的なスタイルとで一世を風靡した作品（N. Grove, vol. 14, 496）。

表6：コミュニティの催しへの出演

| 年月日 | 催し | 出典 |
|------------|--|--------------|
| 1930-1-24 | 国際女性クラブの音楽会（HNG）に夫妻で出演 | 1/20 |
| 1930-2-4 | アメリカの娘たちの演奏会（Meeting of the Daughters of America）（フェリス女学院）に出演 | 1/24 |
| 1930-4-9 | 慈善演奏会（IHA）で独唱、ピアノ四重奏：Florence Buss, J. F. Jordan, H. A. Poole, + Paul Nipkow, S：Hideko Wada, クイルター ‘Blow, Blow Thou Winter Wind’, アンコール ‘I am the Captain of my Soul’, 華族たちの後援【聖アンデレ教会のオルガン基金】 | 4/9, 10, 11 |
| 1930-5-12 | フェリス女学院の演奏会に出演【フェリス女学院再建】 | 5/8 |
| 1931-1-23 | 国際女性クラブの音楽会（HNG）に夫妻で出演 | 1/20, 25, 26 |
| 1932-1-29 | 音楽会（横浜カントリー&アスレチック・クラブ）の企画と出演【横浜のシーメンズ・クラブ】 | 1/29 |
| 1932-2-17 | 横浜ユニオン・チャーチのWoman’s Auxiliary主催の音楽会（F）に出演 | 2/9 |
| 1932-4-15 | 横浜国際女性クラブの音楽会（HNG）の企画と出演 | 4/7, 20 |
| 1932-12-19 | 横浜婦人会の音楽会（HNG）で歌唱【横浜婦人会 Ladies’ benevolent Association of Yokohama】 | 12/17 |
| 1933-3-24 | 横浜国際女性クラブの演奏会（HNG）の企画と夫妻で出演、ギルバート&サリヴァンのオペレッタの歌曲、J. R. McKenlay, Ruth Apar, and Mr. Wevill | 3/24 |
| 1934-4-13 | 横浜国際女性クラブの音楽会（HNG）に出演、リザ・レーマン《ベルシヤの花園》、S：Maria Toll, A：斉藤静子、GB, B：J. R. McKenlay, 各人の独唱も | 4/13 |
| 1934-4-14 | 横浜国際女性クラブの音楽会（HNG）に夫妻で出演、‘My Life’s Delight’, ‘Weep You No More’, ‘Fair House of Joy’, リザ・レーマン《ベルシヤの花園》、Ruth Apar, Mr. F. T. Orr, Mr. J. Roy McKenlay, 伴奏：Mrs. L. T. Woolley | 4/14 |
| 1935-2-9 | 恵泉女学校（Keisen Sustaining committee and the Parents Association）の音楽会（日比谷公会堂）に出演、リザ・レーマン《ベルシヤの花園》、S：Maria Toll, A：斉藤静子、B：J. R. McKenlay【恵泉女学校】 | 2/7 |
| 1935-4-24 | 国際観光の夕べ（日比谷公会堂）に出演、「各国の民謡と踊り」の一環として、Great Britain：クイルター編曲によるエリザベス朝の歌曲、‘Fair House of Joy’, ‘My Life’s Delight’, ‘Weep You No More’, ‘O Mistress Mine’ | 4/23 |
| 1937-5-24 | ウィニフレッド・ローソン訪日歓迎会（横浜カントリー&アスレチック・クラブ）で二重唱 | 5/24 |
| 1938-1-21 | 横浜国際女性クラブの音楽会（HNG）で独唱、selections from Elizabethan lyrics | 1/20 |
| 1941-2-28 | 横浜国際女性クラブの音楽会（HNG）の企画と出演、favorite songs and piano selections, both old and new | 2/23 |
| 1941-4-19 | 横浜クライスト・チャーチの結婚式で独唱 | 4/20 |

IHA = Imperial Hotel Auditorium, HNG = Hotel New Grand

プラノのマリア・トル Maria Toll²²⁾、アルトの斉藤静子、バスのマッケンレーと4人で、1935年には妻や他のメンバーと歌っている。

他に、ロジャー・クイルター Roger Quilter（1877-1953）編曲によるエリザベス朝の歌曲も得意なレパートリーであった様子で、1934年、1935年と1938年に歌っている。クイルター編曲の歌曲集《7つのエリザベス朝の抒情詩》作品12（1908）は全7曲で（Langfield 2001, 674-676）、1934年4月14日にグラハム・バターが歌った3曲はいずれもこの曲集から採られている²³⁾。1935年4月24日には、これら3曲に加えて、別の曲集からの1曲を歌っている。それ

22) マリア・トルは東京音楽学校外国人教師（在職1932～1938）。

23) ‘My Life’s Delight’ は作品12の第2曲（トマス・キャンピオン Thomas Campion 作詞）、‘Weep You No More’ は同第1曲（作詞者不明）、‘Fair House of Joy’ は同第7曲（作詞者不明）。

は《3つのシェイクスピア歌曲》作品6（1905）の第2曲‘O Mistress Mine’である。これは、日比谷公会堂で行われた「国際観光の夕べ International Tourism evening」の舞台で「各国の民謡と踊り International Folk Songs and Dances」の一環として、大英帝国の代表として歌ったものである。1938年1月21日の演奏については「エリザベス朝の歌曲からの抜粋 selections from Elizabethan lyrics」とあるのみで詳細は不詳である。

コミュニティーの催しへの出演としては、国際女性クラブや横浜婦人会の他に、フェリス女学院や恵泉女学校等の女子教育に関わる場も多く、女性の教育と社会的な地位を高めるための運動が続けられていたことが察せられる。

特筆すべきは、ドイリー・カート・オペラ・カンパニー（D'Oly Carte Opera Company）²⁴⁾の花形ソプラノ歌手ウィニフレッド・ローソン Winifred Lawson（1892-1961）が日本を訪れた際、1937年5月24日に横浜カントリー&アスレチック・クラブで行われた歓迎会後の演奏会で、グラハム・バターと二重唱をしたと報じられていることである。ローソンが最初のステージで歌ったのは、第1曲‘Our Little Home’、第2曲‘The Spring has Come’、そして第3曲が二重唱（曲名不詳）で、二人はアンコールとして‘Hey Willow Way’を歌ったと報じられている（1937-5-24 JT）。ウィニフレッド・ローソンは1922年からドイリー・カート・オペラ・カンパニーに所属してギルバート&サリヴァンのオペラで活躍していたので、1925年までイギリスで歌っていたグラハム・バターと面識があった可能性が高く、かつて共演していた可能性も否定できない。何れにしてもロンドンのカンパニーの花形ソプラノ歌手に見合うだけの声と技量とをグラハム・バターが備えていたことの証左と目される。

3. 演奏の評価

グラハム・バターの歌唱に関する評価は、上述の多彩な演奏機会の折々に報じられている。その中から、まずは声に関する評を取り上げると、1930年12月11日のヘンデル《メサイア》公演（東京コミュニティー・オラトリオ・ソサエティ第7回公演、神田YWCA）に先立つ前日リハーサル（12月10日夜）を聴いてのレポートが、次のように伝える。

水曜の夜に彼〔の歌唱〕を聴いた人は、その声の魅力的な音色をすぐには忘れることができないだろう。それは〔このオラトリオの〕テノール・パートに求められる柔らかく慰めに満ちたパッセージに殊にふさわしい音色である。（1930-12-12 JT）

傑出していたのは声の良さだけではない。その歌い方も、とりわけ明瞭なディクションの点で優れていた。1930年の演奏会（1930年4月9日、帝国ホテル）の評がこの点に詳しい。

この歌手を聞く楽しさの少なからぬ部分は、彼が選び抜かれた歌について、たった一つのシラブルさえ失われないほど完璧に発音するという事実によっている。昨夜、正に我々の

24) ドイリー・カート・オペラ・カンパニーは1870年代から1982年まで存続したイギリスの喜歌劇団で、ギルバート&サリヴァンのサヴォイ・オペラを得意とした。

コミュニティで聴かれたようなアマチュアがいるのであれば、音楽に対する我々の渴望をプロの音楽家に和らげてもらう必要はもうほとんどない。(1930-4-11 JT)

この時の演奏曲はクィルター〈吹け、吹け、冬の風よ Blow, Blow Thou Winter Wind〉²⁵⁾ 他であった。

このような高い評価の積み重ねの上で、1931年の横浜での演奏会(1931年1月23日、ホテル・ニュー・グランド)の評は、「グラハム・バター氏は、プロでもアマチュアでも、日本でこれまでに聴かれた最高のテノール歌手の一人として、極めて真っ当に獲得していた尊敬の念を改めて得た」(1931-1-25 JT)と伝えている。

軽いオペレッタの分野でも好評を得ている。1932年5月の東京アマチュア演劇クラブの公演(1932年5月26日、帝国ホテル講堂)でサリヴァンの《ゴンドラの漕ぎ手》から〈輝く瞳を Take a Pair of Sparkling Eyes〉を歌って、「その歌唱が得た熱狂的な拍手喝采に全くふさわしい」と評され、さらにマッケンレーとの二重唱(サリヴァンの《ブラバントのジュヌヴィエーヴ》から〈憲兵の二重唱〉)も「非常にアピールした」と評されている(1932-5-27 JT)。

1932年6月27日付の‘Chiyo Hirose’の記名記事「東京日記 Diary of Tokyo」は、この冬の回顧として次のように述べている。

Personally, we think the winter has been well and will remember it as the one that produced three Heifetz' concerts, as clock on Ginza that chimes the hour, Mr. McKenlay, Miss. Apcar and Mr. Graham Batter doing justice to Gilbert and Sullivan, a tailor who made a pique dress for five yen complete, a bar with a live bowl, Oscar, in it, and no earthquakes worth table talk.

(1932-6-27 JT)

ここでは先シーズンの主要な出来事として、ヤッシャ・ハイフェッツ Yasha Heifetz (1901-1987) の3回のリサイタル²⁶⁾、銀座の服部時計店の新築ビル²⁷⁾と並んで、グラハム・バターとマッケンレーとソプラノのアプカー Ruth Apcar (1896横浜生) が出演したギルバート & サリヴァンの公演を挙げているのが興味深い。

1938年の横浜での出演(1938年1月21日、ホテル・ニュー・グランド)予告では、「横浜と東京で第一級のアマチュア・テノール歌手としてよく知られているグラハム・バター氏がエリザベス朝の抒情曲集から数曲を選んで演奏する」(1938-1-20 JT)と書かれている。

このように様々なジャンルの演奏で高い評価を得ていたグラハム・バターであるが、中でも重要なのはオラトリオや宗教曲の演奏である。例えば1934年の《メサイア》上演について、「とりわけよかったのはテノールのグラハム・バターとバスのロイ・マッケンレーで、難度の高い

25) クィルター《シェイクスピア歌曲集》作品6の第3曲。

26) ハイフェッツは1923年、1931年、1954年来日。

27) 1881年創業の服部時計店は、1894年に現在地に服部時計タワーを建設。1921年に改築のため取り壊したが、関東大震災(1923)で中断し、1932年にネオ・ルネッサンス様式の「服部時計店ビル」として生まれ変わった(https://www.wako.co.jp/clock_tower/)。

アリアとレチタティーヴォのパスセージ解釈に優れていた」(1934-12-18 JT)と報じられており、アリアだけでなく語りの要素の強いレチタティーヴォについても、その解釈の卓越性が特記されている。

1939年の《メサイア》上演(12月2日、日比谷公会堂)の評は「グラハム・バター氏は、声の良さに加えて、信頼できる歌いぶりで非常に満足できる」と記した他、次のように伝える。

この上演のハイライトは、前年までと同様に、グラハム・バター氏のテノール独唱であった。バター氏は、この上なく喜ばしい声を持ち、それを傑出した声楽技巧で使いこなし、自分の担当するアリアの数々を最上のディクションと模範的な音楽解釈とで聴かせた。²⁸⁾

(1939-12-4 JT)

グラハム・バターの歌唱については、声の良さ、その柔らかな美しさに加えて、歌唱の確かさ、すなわち「最上のディクションと模範的な音楽解釈」が高い評価を生み出していたことが改めて知られる。

4. 生涯の概略

グラハム・バターの生涯について、『ジャパン・タイムズ』の記事から判明する範囲で概略を示すと、1926年6月12日に神戸の領事館でバルバラ・バス(Barbara Bass)と結婚し(1926-6-12, 14, 15 JT)、翌年春の東京での《メサイア》上演時には夫妻で帝国ホテルに宿泊している(1927-4-18 JT)。1938年3月に6ヶ月のサバティカルを得て英国へ帰国する際には「妻と2人の子ども」とあり(1938-3-26 JT)、子宝にも恵まれたことが知られる(表7参照)。

表7：音楽以外の記事

| 年月日 | 事項 | 出典 |
|------------|---|--------------|
| 1926-6-12 | 神戸でバルバラ・バス(Barbara Bass)と結婚 | 6/12, 14, 15 |
| 1927-4-18 | 帝国ホテルの宿泊客リストに夫妻の名前 | 4/18 |
| 1927-4-19 | 神戸に帰った | 4/19 |
| 1933-2-14 | 横浜のアメリカ領事館のティー・ダンスに夫妻で参加 | 2/14 |
| 1934-5-23 | ゴルフの試合ライト・メキシカン・カップ(Wright Mexican Cup)で夫人が優勝 | 5/29 |
| 1938-3-24 | 妻と2人の子どもと共に横浜から英国へ出発、6ヶ月の休暇 | 3/26 |
| 1939-1-31 | 夫人が横浜テニス&クロケット・クラブの翌年度の委員に選出 | 1/31 |
| 1940-9-初旬 | 娘が進学のためカナダに渡航 | 8/30 |
| 1940-10-31 | 夫人が氷川丸でカナダへ | 10/24 |
| 1941-7-8 | 横浜のテニス委員会の委員に選出 | 7/8 |
| 1941-8-5 | ダブルスの決勝 | 7/11, 18 |
| 1941-11-14 | 横浜から長崎、上海経由でカナダへ | 11/8 |

28) ‘Solo Highlight: A highlight of the performance, as in previous years, was the tenor solo of H. Graham Batter, who has a most pleasing voice, used with outstanding vocal skill, and who sang his arias with excellent diction, and exemplary musical interpretation.’ (1939-12-4 JT)

戦争末期の1940年にはまず娘が、続いて妻がカナダへ渡り、グラハム・バター自身も1941年11月14日に横浜港から長崎、上海経由でカナダへと渡って行った（1941-11-8 JT）。その離日を告げる記事には次のように記されている。

Mr. Batter was well known in musical circles in both Tokyo and Yokohama and will long be remembered for his pleasing tenor voice heard in many concert programs. He was also one of the leading tennis players both at the Bluff Gardens and at the Yokohama Country and Athletic Club where he won the spring championship doubles with Mr. P. Aurell. (1941-11-8 JT)

夫人共々スポーツも得意であった様子で、テニス大会で優勝したことも述べられているが、ここでより注目されるのは、グラハム・バターが「東京と横浜の音楽界でよく知られた存在で、数多くの演奏会プログラムで聴かれた喜ばしいテノールの声で永く記憶されるだろう」というフレーズである。

5. アマチュアの音楽活動

オラトリオ、中でもヘンデルの《メサイア》は19世紀から20世紀にかけて、欧米の数多くの合唱団体（Choral Society）によって歌い継がれてきた。そのメンバーの大半はアマチュアで、純粋に歌う喜びによって集い、練習を積み重ねて、年に数度の舞台上演を実現してきた人々である。オラトリオの演奏史を語る上で、アマチュアの実存は見落とすことのできない重要性を持っている（McVeigh 2001, 139-141）。

こうした事情は日本にも当てはまる。《メサイア》の本邦初演（1925）を行なった人々、とりわけその合唱を担った人々は宣教師やその妻や娘、教会に連なる人々やキリスト教系の学校の学生など、いずれもアマチュアの歌い手であった（津上 2022, 102-104；津上 2023, 121-123）。

《メサイア》の本邦初演（1925）と関西初演（1927）が行われ、また東京再演（1927）で広く日本人に参加が呼び掛けられたことも与って（津上 2023, 127）、次第に合唱熱が高まり、継続的にオラトリオ上演に取り組む合唱団が次々と現れるようになった。

1939年の《メサイア》上演の評は、次のように伝える。

この毎年の上演は多数の心酔者たちにとって、とりわけ東京と横浜の国際的なコミュニティにとって重要な催しとなってきており、その演奏は年々、人数と演奏の質の双方の点で着実な成長を遂げてきている。…聖三一教会、聖アンデレ教会、東京ユニオン・チャーチの聖歌隊から追加の歌い手を加え、また青山学院神学部と東洋英和女学校師範科の学生コーラスも加えて総勢200人に近い大合唱となった。 (1939-12-4 JT)

グラハム・バターが活躍したのは、正にこのような流れの中であった。教会関係者はもちろん、学生たちも加わった大きな合唱団を後ろに控えて舞台に立ち、そうした熱意ある人々の前

でソリストとして歌ったのである。幼年期から専門的に鍛え上げられた声と技量を發揮して、人々の手本となるような歌唱を毎回、披露したのである。

優れた音楽家と舞台を共にすることは、共演者を大きく成長させる。黎明期ないしは成長期にあった日本の合唱人たちは、オラトリオをどう歌うのか、歌詞をどのように発音し、歌詞の内容をどのように音楽的に表現するのかを、リハーサルでも本公演でも、グラハム・バターの歌唱に接する度に、吸収していったことだろう。

グラハム・バターが参加した最後の《メサイア》公演（1940年12月14日、日比谷公会堂、東京ヴォランティア合唱団第15回演奏会）²⁹⁾ は、次のように評されている。

120人の歌手からなる合唱は…アメリカ人、イギリス人、カナダ人を含んでいるが、歌手の大半は日本人、台湾人と韓国人である。この合唱団には15もの異なる宗派が含まれるが、偉大な音楽の力によって、人種、信条、皮膚の色や国籍といった違いは全て取り払われてしまう。
(1940-12-15 JT)

はっきりさせておかなければならないのは、この大合唱は全くのアマチュアによるものであるということだ。大半は学生と勤め人で、すぐれた音楽を歌うという純粋な喜びのために勉強や業務の時間を割いて中田氏の指揮の元に集まって歌っている。この合唱団は最大の賞賛に値する。というのも彼らの歌唱は喜びと靈感に満ちているからである。この集団はよく訓練されていて、その証拠に音の入りと切りが明確で、合唱の仕方が音楽的なスタイルに叶っている。
(1940-12-15 JT)

合唱が良い合唱となるためには、もちろん指揮者の力量も重要であるが³⁰⁾、歌唱の手本が身近にあるのが理想的である。そうした音楽的な環境を提供した一人の卓越したアマチュア音楽家、それがグラハム・バターの日本における15年間であったと言える。

サリヴァン等の軽いオペラやキルター等の世俗歌曲でも優れた歌唱を聴かせたグラハム・バターであったが、そうしたレパートリーが主として東京と横浜の外国人サークルで享受されたのに対して、オラトリオ、中でもヘンデルの《メサイア》の歌唱は、次第に成長していく日本の合唱人たちに歌唱のあり方を示すことによって広く深い影響を与えた点で、本邦音楽界に対する功績として遥かに意義深いものがあつたと位置づけられる。

参考文献

クランメル、J. W. 編 1996『来日メソジスト宣教師事典』東京：教文館

鈴木範久監修 2020『日本キリスト教歴史人名事典』東京：教文館

中等教科書協会編 1927『中等教育諸学校職員録 昭和12年（第34版）』東京：中等教科書協会

29) この時の独唱者は、ソプラノが野崎住子（神戸女学院音楽教師）、アルトが河野清（東京府立第六高等女学校音楽教員）、バスが矢田部勤吉で、管弦楽は鈴木弦楽オーケストラ（22人）であった。

30) 指揮者の中田羽後については、アメリカで合唱指揮の専門教育を改めて受けてきたことが報じられている（1940-12-15 JT）。

- 津上智実 2022 「歌の系譜：戦前の東京コーラル・ソサエティ」『神戸女学院大学論集』69-2, 91-107
- 津上智実 2023 「ヘンデルのオラトリオ《メサイア》の日本初演——その実態と成立の経緯——」日本音楽学会『音楽学』68-2, 115-129
- 鶴橋泰二 1927 『現代音楽大観』東京：日本名鑑協会
- 日本キリスト教歴史大事典編集委員会 1988 『日本キリスト教歴史大事典』東京：教文館
- Langfield, Valerie. 2001. “Quilter, Roger.” In *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*. 2nd ed., edited by Stanley Sadie and John Tyrrell. London: Macmillan.
- Mamisashvili, Nodar. 2001. “Sullivan, Arthur.” In *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*. 2nd ed., edited by Stanley Sadie and John Tyrrell. London: Macmillan.
- McVeigh, Simon. 2001. “London (i), VI, 2(i) Concert life: 1800-1850.” In *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*. 2nd ed., edited by Stanley Sadie and John Tyrrell. London: Macmillan.
- The Directory of Japan*, Yokohama: The Directory of Japan Publishers, 1927

(原稿受理日 2023年3月15日)